

授業研究会の記録

[自評 (☆)、質疑 (Q)、応答 (A)、意見・感想 (○)]

司会者 授業Ⅰ 熊本市立花陵中学校 教頭 木村 光利

授業Ⅱ 熊本市立二岡中学校 教頭 安方 史宜

授業Ⅰ 授業者 熊本市立花陵中学校 教諭 原 辰徳

養護教諭 今坂 道子

授業Ⅱ 授業者 熊本大学教育学部附属中学校 教諭 長浦 卓也

助言者 授業Ⅰ 熊本市立桜木中学校 校長 香山 悟

授業Ⅱ 熊本市立竜南中学校 校長 海津 英孝

[授業者自評]

【公開授業Ⅰ】 保健2年生「飲酒と健康」について

☆(原) 課題に対して、子ども達同士の考えを共有する時間を必ず確保するようにしている。また班での共有、全体での共有のためにも、個人思考の時間を確保するようにしている。今回のようなグループ学習の際には、自分自身の学びを支えること、班のメンバーの学びを支えることを大事にしている。何もしないで、人の発表だけを聞いて、学んだつもりにならないようにしている。今回、ICTの活用という点では、授業支援アプリはロイロノートを使用した。「めあて」に迫る活動を促すため、病院や団体などのホームページ等から6枚のシートを準備した。その中から役割が重ならないようにグループ内で分担し、主体的に活動に取り組めるよう配慮した。

導入で飲酒のプラス面、マイナス面のイメージを持たせようとして、学習課題を「どうして子どもはダメなの？」とし、自分の問題としてとらえやすいように工夫した。

養護教諭との連携については、基本的には保健体育教諭が授業を行える準備をしたうえで、養護教諭に押さえてもらいたいところや子どもとの関わり方などの打ち合わせを行い、授業に臨んだ。

☆(今坂) 今回は、ゲストティーチャーのような形ではなく、打ち合わせに中でもう少し自然な形でできないだろうかと考え、今日のような授業となった。生徒が調べてまとめる活動中には巡回しながら、簡単な説明を行い、押さえておきたい2つのワードについて養護教諭から補足説明する形にしてみた。また、終末では、今回の「飲酒と健康」を知識として理解した後で、生徒が自分の暮らしと重ねることや将来にわたって健康を管理する力をつけてほしいという養護教諭からの思いを伝える場面も入れてもらった。生徒の活動をしっかり行わせるために、保健体育科教諭と養護教諭がどのように関われば効果的かという話し合いを原先生と重ねることができたように思っている。

【公開授業Ⅱ】 実技 球技1年生「プレルボール」について

☆今回のめあてについて

今回、初めて守備における動きに焦点をあてた。守備における大切な動きについて、多くの気づきがあった。

さらに、まとめの時間では、ただ戻るのではなく、相手コートにあるときのボールや動きを観ながら、ボール状況に合わせて定位置を左右前後に変化させる必要があることもレベルアップした内容として出してくれた。

課題としては、全体共有後の後半のゲームで生徒達から出てきた守備における大切なポイントをもっと「キーワード」として自分達で声かけ合ったり、さらにアドバイスしあったりしながらプレーが

活発になるともっとよかった。この点については6、7時間目にて自分達で学んだことや気づきを「キーワードとして」意識しながら、さらによりプレーが出てくるようにしていこうと伝えた。

☆様々な関わり方を通しての課題解決

運動しながらも対話的・主体的な深い学びにしていくために、授業の中で見方・考え方を働かせる必要があります。今回は課題を解決するために、する・みる・支える（撮影）の関わりを通して、さらにiPadを効果的に使う、といった点を工夫した。生徒達がプレーしながら、観ながら、映像や作戦ボードをつかひながら課題解決する姿を引き出せたと思う。

課題としては、映像をiPadで撮影する際に、基本は横からの撮影を基本として取り入れた。動きを分析するという視点から、上や縦の角度で映すとより効果的になったのではないかと考えた。

☆単元計画や1時間ごとの計画について

単元については、はじめからゲーム中心でゲームの方法を進化させていった。

W-up、ゲーム①話し合い、ゲーム②、振り返りという流れで学びを積み上げていった。

球技における単元の流れや1時間ごとの授業の流し方は様々あると思う。ここが一番迷った点。

[質疑・応答]

【授業Ⅰ】

Q原先生が事前に配布していた6つのカードについて

A日赤など病院などの団体から活用している。飲酒のプラス面・マイナス面が記載されているものを選んだ。また未成年の飲酒の影響などの情報が載っているものは省く形で選んで配布した。

Q調べ学習をさせるときに情報があふれる中でめあてに沿った流れにするために実践・工夫したことを教えて欲しい。

A学習カードを工夫して良い影響・悪い影響・その他というように分類するなど工夫して、思考を狙い沿う形に設定した。

QICTの活用で気をつけていること。

A今回はロイロノートを活用したが、メタモジを活用することも多い。普段は紙のシートを使用するのではなくて、配布したシートに書き込んで再度ロイロノートで提出するなどしている。しかしながら、今回の授業では作業が繁雑になったり、活動の時間が不足してねらいに迫れなかったりしたことがあったので、紙のシートを活用してまとめたものをタブレットで撮影して提出させるという形で対応した。

【授業Ⅱ】

Q班分けをする際、どのような決め方をしたのか。

A5人1チームを8チーム作った。リーダーを始めに決めたらうで教師が男女と運動能力を均等に振り分けた。

Qビデオを撮影していたが、分析する際の視点を教えていただきたい。

A今回は守備の様子を撮影させた。相手コートにボールがある時の守備の位置を意識させた

Q構想案では、オンザボールをした後でオフザボールにされていた。理由を知りたい。

Aアタックを積極的に打たせたかったので、先にオンザボールにした。オフザボールはそのアタックに対する守備を考えさせたかったので、この順番にした。

Q安全面で工夫したことを教えていただきたい。

A技能が高まるとゲームのレベルが上がるので、コートを広くとった。特に縦を広くした。ボールはバレーボールより柔くて軽いボールを使った。

Qボールはキャッチしても良いか。

A基本的にはキャッチしないことにしている。下からレシーブをすることは許可している。

Q守備のフォーメーションを考えたのは、生徒か教師か。

Aボールをつないで返すことができることを意識させたうえで、フォーメーションは生徒が考えた。
(フォーメーションの例) △ ▽ L —

Q2・3年生に向けてどのようにバレーボールの授業につなげていくのか

Aキャッチバレー⇒バウンドバレー⇒正規のバレー(4・5・6人)と段階的に行っていく予定。プレルボールをレベルアップさせるなら、バドミントンコートでネットの高さも上げると良い。

Q3人対3人なのにコートを広くした理由を教えてください。

Aコートは横7m 縦6m(12m)ネットの高さ70cmにした。ボールに触れ技能を積み上げること、全員がボールに触れ、3回で返すことを目的とした。空いた空間の攻防を中心としたラリーを目指したかったので、コートを広く設定した。

[研究協議]

競技の柱

授業Ⅰ：養護教諭の授業への効果的な関わり方

授業Ⅱ：ICTの効果的な活用

【授業Ⅱ】

Q養護教諭の授業参画について経験のある・なしの違いは大きい。どのように養護教諭に授業に参加してもらおうのか？

A性に関する指導やストレスマネジメントの際は入ることがある。打ち合わせが難しい面があるが、日頃は気軽に参加して専門的なところを押さえるという形で入っている。

○養護部会でのアンケートでは効果的だと思う単元は応急手当、心肺蘇生、エイズ、性感染症などが多く選ばれていた。実際に授業に入りやすい単元ではある。(養護教諭部会)

Q養護教諭の先生が保健の授業に入ったことで学校生活などに効果的なことや良くなったことなどはあるか？

A生徒が来室した際に授業でのことを話してくれ、生徒との繋がりができた。SCのことも授業で触れたのでSCのカウンセリングなどへのハードルが下がって効果があって良かった。(岩根先生)

○養護の先生が授業に参加することで、どんな時に怪我するのかなど身近な事例で話をしてもらうことができ非常に助かる。性に関する指導については男性の職員では触れにくい内容にも触れやすく効果的である。普段、保健室を活用しない生徒との交流の場になって良いのではないかとの意見もあった。

○養護教諭自身が生徒の立ち位置や様子が確認できたことがとても効果的だった。一緒に授業作成する中で自分自身が勉強した。生徒は先生が来てくれて嬉しいと言ってきて嬉しかった。(今坂先生)

【授業Ⅱ】

- オリエンテーションの際に、ロイロノートを活用してお手本となる映像を生徒に提示する。生徒は、ロイロノートでいつでも見ることができる状態にしておく、技能向上に繋がりがやすいと思った。授業の学習カードをロイロノートで提出させることで、思考の可視化をすることができ、評価に繋がやすいという意見も出た。
- ふりかえりシートを学習カードで提出させる。また、映像を活用し、自分の姿を追っかけ再生する
- 保健分野の「交通事故の防止」ではGoogle mapでストリートビューを活用すると効果的
- マット運動・ハードル走において活用している。自分の姿を動画に撮影することで、自分自身のふりかえりもできるが、学習の様子を保護者や家族に見てもらえることができるので、今までにないことができるようになった。
- 実技テストを撮影し、ロイロノートで提出させることでじっくり評価をすることができる。
- 実技の教科書で動画を見て、イメージを湧かせることにとても効果的である。
- 自分の動きやチームの動きなどを動画や写真を撮りためておけば、レポート作成時に有効に活用できる。個人の思考が可視化されるので、教科書や調べたことをまとめるだけのレポートより質の高いものを作成することができると思う。評価もしやすいと感じている。
- ハードル走の授業で動画を撮影し、分析させると子どもたちは様々な視点を持つ。教師側は授業のねらいに沿った視点をキーワードとして提示することが大切であると思っている。また、撮影する位置も指定しておくことも大切だという意見が出た。

[指導・助言]

【授業Ⅰ】

中学校において2021年度より全面実施となった今回の学習指導要領では、社会に開かれた教育課程の実現を目指し、各学校におけるカリキュラムマネジメントの実現が求められている。学習においては、「何を学ぶか」「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」をキーワードに創意工夫した学習指導の展開が期待されている。

そうした中、中学校保健体育科では、保健分野において“現代的な健康問題の解決にかかわる内容や心肺蘇生法等の技能について内容を改善する”ことが示された。

また、個人生活における健康に関する課題を解決することを重視する観点から、内容を学年ごとに配当し、新たに生活習慣病などの予防で「がん」を取り扱うことを示している。さらに「見方・考え方」を広げ、体育分野と保健分野の相互の関連を図ることや応急手当てにおける技能・危険予測学習における表現についても言及している。評価の観点においては、他教科との整合性を図る内容構成の改善を行い、指導内容の系統性・重点化を図り、指導と評価の一体化を求めている。

熊本市では、学習指導要領の改訂、全国・九州・県のテーマを踏まえ、「自ら運動の喜びや楽しさを求め生涯にわたり健やかな心と体をはぐくむ保健体育学習の在り方」について「主体的・対話的で深い学びを図る指導の工夫」の観点から具体的に取り組んできた。

こうしたことを踏まえ、今回の保健の学習を考えてみたとき、単元を通して健康に関する課題について一人一人が自ら考えさせることがよくできていた。ICTの活用の観点では、調べる際の枠を広げすぎず、調べた内容が学びにつながる工夫がなされていた。

養護教諭の授業参画については、今回貴重な提案であった。基本的には次の4つのパターンが考えられる。

- ① ゲストティーチャーとして、授業のポイントに説明する。
- ② 保健体育教師とともに授業内容に応じて役割分担をして行う。
- ③ 支援が必要な生徒を中心に授業に参加する

取組にあたっては、各学年の学習内容をあらかじめ明らかにしたうえで、各学年1単元を目安に参画しやすい内容から共同で授業づくりをしていくことから始めてみるのが長く続いていくことにつながるのではないかと。生徒への対応についてもお互いの立場からアプローチしていくことでかみ合う場面が増えていく。

- ④ 兼務発令を申請し、単独で授業を行う。

これまでは比較的①のパターンが多かったのではないかと。今回熊本市の取組の中では、養護教諭部会の協力を受け、様々な参画を模索し、②の具体的な方法について研究を重ねてきた。

また、それぞれに学校内での役割があることを理解し、各学校における効果的な授業参画について今後も様々なスタイルが展開されていくことを期待する。

【授業Ⅱ】

本年度より中学校において全面実施となった今回の学習指導要領では、社会に開かれた教育課程の実現を目指して、各学校におけるカリキュラムマネジメントの実現が求められている。学習においては、「何を学ぶか」「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」をキーワードに創意工夫した学習指導の展開が期待されている。

そうした中、中学校保健体育科では、体育分野において“体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等に関わらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方が共有できるよう内容を改善する”ことを通して「運動やスポーツが楽しいと感じる授業づくりを目指す」ことが示された。具体的に体育分野では、12年間を見通した指導内容の明確化や共生の視点を踏まえて内容を改善することが示されるとともに、運動やスポーツを「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方で体育の「見方・考え方」を広げることで豊かなスポーツライフの実現へとつなげるよう整理された。また、評価の観点において他教科との整合性を図る内容構成の改善を行い、指導内容の系統性・重点化を図り、指導と評価の一体化を求めている。

熊本市では、学習指導要領の改訂、全国・九州・県のテーマを踏まえ、「自ら運動の喜びや楽しさを求め生涯にわたり健やかな心と体をはぐむ保健体育学習の在り方」について「主体的・対話的で深い学びを図る指導の工夫」の観点から具体的に取り組んできた。

今回、「プレルボール」という言葉を初めて聞かれた先生もいらっしゃると思うが、実は私もその中の一人であり、ここで勉強させていただく機会を頂いたと感謝をしているところだった。

私は、撮影の日にお邪魔して実際に授業を参観させていただいたが、男女が協力して考え、意見を交換しながらめあてや課題に沿った思考を巡らせて工夫し、楽しくプレーする姿と歓声があがる、あつという間の50分間だった。まず、すばらしかった点は、

- ①男女共習のグループは、男女比が異なってもどのグループも協力して言語活動での課題解決の場面がみられたり、ゲームをしたり、役割分担をしたりして学習する場面が見られたこと。
- ②タブレットやプロジェクターなどICTを活用した先生の説明や生徒の話し合い活動が有効になされていたこと。
- ③生徒の活動量を考慮した場の設定やケガをしないような用具や道具が使われていたこと。
- ④授業の中で「する・見る・支える・知る」の場面がしっかり設けられていたこと。

⑤ウォーミングアップやゲーム方法にサークルプレルやプレルラリーゲーム、プレルアタックゲーム等の長浦先生がネーミングをつけて区別されていたので、生徒にとってはとても分かりやすく、迷うことなく取り組むことができていたこと。

⑥この授業で生徒たちがどんな課題に取り組むのかがはっきりしていたことが挙げられる。

私の経験では、バレーボールを計画した時に、1年では「パスラリーゲームができるようになる」、2年生で「三段攻撃ができるようになる」、3年生で「いろいろな攻撃ができるようになる」として取り組んで、『バレーボール』を教えることを目指していた。それを達成するために、9人制や6人制、さらにはミニバレーやソフトバレーに取り組んでいた。同様に取り組まれてこられた方も多いと思う。学習指導要領 中学1・2年の球技における知識・技能については、「ネット型では、ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所を巡る攻防をすることを身につけることができるように指導する」と記載されている。

自評でも説明があったが、プレルボールは中学校学習指導要領保健体育編にも例示してあるスポーツである。

長浦先生は、学習指導要領の内容と生徒の実態からプレルボールが学習指導要領の内容を習得するために最も適した運動として取り組まれていた。

プレルボールはバレーボールに繋げるためのものだけではなく、ネット型で身につけるべき動き(定位置に戻るや空いたスペースをめぐる攻防を誰もが取り組むこと)を身に付けることを目的とされている。

ゲームは3対3で行われ、必ず3回で返すことや1回はボールに触れなければならないので、生徒たちには適度な運動量があったと思います。さらには、ワンバウンドさせてラリーを続けるので、強いボールが返ってくることも少なく安心してボールに向かうことができたよだ。そうしながら、定位置に戻る動きや空いたスペースを使うことを身に付けることを意識しながら学ぶことができた。

さらに長浦先生は、プレルボールを修正して、アタックを取り入れたプレルアタックゲームを生徒に取り組ませていた。このことで、より「定位置に戻ることや空いたスペースをめぐる攻防が一段とレベルアップし次のような姿が生徒たちに見られるようになった。

ゲームの間に設けられたチームでの話し合いで、「相手コートにボールがある時にどう動けばよいか」というめあてに対して、「強いボールは後ろに下がった方がいい」とか、「いつでも対応できるように元の場所に早く下がって構えた方がいい」や「1人が前で後ろ2人の方がいい」など、とてもいい意見が飛び交っていた。また、あるグループは実際に動きながらみんなで確認をしていた。

さらには「相手の動きやボールの状況で、自分たちの守る動きも変えたほうがいい」や「空いたスペースへの攻撃に対する対応も必要」という発展した意見も出ていた。

生徒たちが、自分たちで分かりやすいいろいろな学び方を工夫することで、学習指導要領が求めている学びが展開されていた。話し合う場面の動画では、生徒たちが頭を寄せ合って言語活動を行う場面が見られたが、あの姿こそ新学習指導要領が求める「学びの姿」と言われる方もおられる。

その後、各グループで導いた結論を全体で共有することにより、本時のねらいがさらに具体化され、どのグループもラリーがより続き、歓声が響きわたるゲームが展開されたのだと思った。

プレルサークルやプレルラリーゲームでは、手のひらが床の方向に向いたボール操作が多かったが、アタックを取り入れたことによりバレーボールのアンダーハンドパスのような要領でボール操作をする生徒も見られるようになり、強いボールに対しても徐々に対応できるようになったのは見ていて新鮮だった。

これらは、ボール操作や用具操作に違いはあるが、他のネット型スポーツでも大切な要素となる技能を習得する授業であったと思う。

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行うことで、育成を目指す資質・能力を育くんだり、体育や保健の見方・考え方をさらに豊かなものにしたりにすることにつながる言われている。

今回は、熊本県が推奨する学習構想案に基づいて作成されており、先生方の参考になるものと思う。その中に「めあて」や「課題」とあったが、私自身そのすみ分けが曖昧だったので、調べてみて私にわかりやすかったものをご紹介します。

まず、

①「学習のめあて」は、生徒の側に立った行動目標。この1時間で何ができるようになればいいのか、何がわかればいいのかははっきりわかる表現のもの。「～して、～しよう。」「～して、～が出来るようになる」という形で表現されるもの。(教師からの呼びかけ)

今回の学習構想案には「守備の時の大切な動きができるようになる」となっている。

②「学習課題」は、解決されるもの。「なぜ、…だろう?」「どうしたら…だろう?」という問いの形で表現されるもので、学習構想案には「守備に備えるため、相手コートにボールがある時には、どのような動きをしたらよいのだろう」としてある。

討議の柱では「ICTを効果的に使った授業の在り方」について。

10月22日(金)の新聞記事において「県内全市町村に通信環境と端末が整った。」と報道されていた。

今日の討議の柱は、まさに旬の内容であり、活用の仕方について参考になる話がたくさん聞くことができたのではないと思う。今後さらにICTを活用した授業法が研究され、その効果が直接生徒たちの学びへ有効に還元されることを強く望むところである。

結びに、熊本大学附属中学校 長浦卓也先生と1年2組の生徒さんたちには貴重な授業をご提供頂いたことに改めて感謝を申し上げます。